

関東ラグビーフットボール学生クラブの現状と課題
Present situation of
Japan East Collegiate Rugby Football College Club League

1K09B112

杉本 友太

指導教員 主査 作野 誠一 先生

副査 中村 千秋 先生

【目的】

2019 年ラグビーワールドカップが日本で開催されることが決定した。ラグビーワールドカップが成功すれば、わが国の経済に良い影響を与えるだけでなく、ラグビーの持続的な人気にもつながるであろう。しかし、日本においてラグビーは人気のあるスポーツとは言い難く、現在の日本のラグビーの普及の状態が続けば 2019 年ワールドカップを成功に導くことはできない可能性が高い。こういった現状に対し日本ラグビー協会は普及の基本方針を出しているが、これまでのところ筆者の周りではそれを感じることはできていない。

現在、筆者はラグビーを学生クラブチームにおいて実施している。様々な理由から体育会を選ばずして、学生クラブチームを選んだ。筆者のように比較的小さなクラブに身を置き、サポート体制も未熟な状態でラグビー実施を続ける、いわゆる「すそ野」でのラグビーの発展・普及が進めば日本ラグビー全体のラグビー普及につながるのではないかと考えた。

以上より本研究では、現在筆者が所属している学生クラブの実態を調査し、その運営の問題点及び改善点を示すことで、「すそ野」である学生クラブのラグビーの発展・普及につなげることを目的とする。

【方法】

まず学生クラブの学生委員である全体統括者にインタビューを行い、学生クラブ運営の実態、問題点、要望等を明らかにする。

そのインタビューの結果及び運営の実態を照らし合わせ、学生クラブ所属のチームの中から 8 チームを選び、その各代表者にもインタビューを行う。ここではチーム状況、運営についてどのように認識しているか、他チームとのつながりはあるかなど、チーム側から見た運営の現状を抽出し、考察を行う。

【結果】

初めに、学生クラブ運営サイドの全体統括者とのインタビュー結果について述べていくことにする。学生主体を行う狙いは、ラグビーをプレーする学生と同じ目線に立って、より柔軟な運営を行うためであったが、その狙いがあまり各チームに伝わっていないようである。また、各チームに運営をよりよくするための意見を望んでいるものの、その意見を吸い上げることができない状況であった。各チームより派遣されるクラブ委員の仕事への意欲・やる気に差があることも問題視されている。また同時にそれらを改善することがより良い運営に結びつくと考えている。

次に各チームへのインタビュー結果について述べていくことにする。各チームともにチームの事情は異なり、チームの抱える問題、運営側に対する認識にも差があることが明らかとなった。ほとんどのチームは、学生運営に切り替わったことを知っていながらも、運営委員会とのつながりをほとんど感じていないことも明らかになった。さらに、ほとんどのチームが他チームと関係をもつことなく活動していることがわかった。

しかしながら、運営委員会とつながりがあれば意見をしたい、あるいは他チームとつながりたいと答えるチームは多かった。

【考察とまとめ】

今後、さらに学生クラブにおけるラグビーを発展・普及させていくためには、①運営委員会と各チームのつながりを強めること、②それによってチームから運営委員会への意見を活発にすること、また③そのためにはクラブ委員の役割と責任を見直すこと、さらに、④チームごとにつながりを深めること、以上のような取り組みが必要であろう。

それらを実現させるためには、具体的に、運営側と、各チーム代表者が直接に顔を合わせる機会を増やすこと(キャプテン会を定期的に行うことなど)が求められるであろう。

